

四国地域の総合開発計画シンポジウム基調講演 『四国遍路の価値とそれがもたらす交流拡大』

(一社) 四国八十八ヶ所霊場会会長
四国霊場第31番札所 竹林寺住職
海老塚和秀

①四国遍路とは

四国四県に点在する弘法大師（空海）ゆかりの88の札所（霊場）を結ぶ約1400キロに及ぶ遍路道を巡る我が国を代表する壮大な回遊型巡礼路であり、1200年の歴史を今に伝えている。

また、巡礼を支える「お接待」の慣習が今も地域の中に息づく、生きた文化遺産。

②四国遍路の価値（四国遍路世界遺産登録推進協議会中間報告書から）

「本資産は、弘法大師信仰という宗教・宗派を超えた民間信仰を軸に、辺境の島四国全体で展開された、近世社会の成熟に随伴して発生した諸課題の受け皿として機能したユニークな信仰の物証である。四国遍路は、四国において、弘法大師とともに多数の霊場を巡る巡礼者と、接待することで自身も功徳を得る地域社会、それぞれが弘法大師信仰の仕組みのもと、ともに救いを得る社会システムとして機能した。そこでは、藩という行政区域を超え、宗教・宗派や貧富を問わない多様な個人を繰り返し受け入れるという特異な信仰の形が生まれた。このような四国の地に成立し、世界に類を見ない、広域に広がった民間信仰として四国遍路は顕著な普遍的価値を有する。」

四国遍路世界遺産登録推進協議会「普遍的価値の証明」部会 2024

③四国遍路の今

- ・全長1400キロの遍路道／車やバスを利用して9～10日／徒歩で40～50日を要す。
- ・さまざまな動機、宗教宗旨、巡り方（バスツアー遍路・徒歩遍路／順打ち・逆打ち／通し打ち・区切り打ち、など）を受け入れる。
- ・近年は徒歩遍路や外国人遍路が増加。
- ・ロンリープラネット『2022年に訪れたい場所・地域部門』で世界6位。
→ オーセンティック／日本人の本来の精神性や祈りの心に触れることができる。

④四国遍路の歴史

- ・四国遍路の原型は四国の自然と一体となり修禪をする山林修行。
- ・奈良時代、大自然の難所で苦行し、身を清めて懺悔し功徳を得る「淨行」が流行。
- ・若き日の弘法大師（空海）の刻苦修行（四国は空海の誕生・修行・悉地体験の聖地）。
- ・平安時代には都から離れた山や海辺の難所を回る「辺地（へち）修行」へと展開。
多くの修行者が四国へ。（伊予国石鎚山や阿波国大瀧ヶ嶽などへの山岳信仰、補陀落（ふだらく）淨土への入り口として知られる土佐国室戸岬や足摺岬など、都から南西に位置する四国は「聖なる島」として信仰を集めた。）

- ・のちに空海が弘法大師として敬われるようになると、鎌倉時代には大師が修行した遺跡を巡る修行が始まり、場所が次第に固定化されていくことで、室町時代には現在につながる巡礼の道を形成。
- ・室町から江戸初期には「入定（にゅうじょう）信仰」「同行二人（どうぎょうににん）信仰」が流布。一般民衆も巡るようになる。
- ・四国には、在地の神々の信仰に加え、熊野信仰や補陀落信仰も伝わっており、これらに弘法大師信仰が加わることで、あらゆる宗教宗派を包み込み、統合する「四国遍路」という巡礼が完成。
- ・弘法大師信仰がさらに高まると、江戸時代までには、神社も含む多様な宗教宗派の八十八の札所が固定されるとともに、後にすべての札所に大師堂が建立され巡拝されるという特殊な巡礼形態を持つようになった。
- ・僧 真念（しんねん）、一般向けの初の案内本『四国徳禮道指南（しこくへんろみちしるべ）』を貞享4年（1687年）に著し、遍路道を整備。これにより庶民の「四国遍路」が定着。
- ・衛門三郎（えもんさぶろう）～遍路の元祖と伝わる。

⑤現代における四国遍路の魅力

- ・四国は人々が安心して迷子になれる場所
- ・四国は「再生」・「生き直し」の場所
- ・心のチャンネルが変わる
- ・心の GDP

⑥四国遍路をめぐる今日の課題

- ・お遍路さんの大幅な減少
- ・遍路道の保全・継承
- ・おへんろ宿の大幅な減少
- ・外国人遍路・歩き遍路の受け入れ体制

⑦四国遍路と遍路文化を世界遺産に

- ・四国遍路世界遺産登録推進協議会が中心となり産官学民「オール四国」で取り組む。
- ・課題
 - ・資産の保護措置の充実
 - ・顕著な普遍的価値の証明
 - ・地域コミュニティの積極的な参加

⑧四国遍路がもたらす交流拡大